



岷江入楚

藤袴

才庇

特別
12
4604
29



112
4604
29

ふれしころのしめよといふ

必原と内大臣と也

たやとかりしころあか

必原とつる中し花因 実又うねゆといふ

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

花御門乃御門と申すは

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

申すは

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

いりしころのしめよといふ

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

必原とつる中し花因

源氏密通とるけくせ

河美川水原の葉をうけい人のれろく
呪詛 日本記 けいん 又日本記 誓をうけい
と誓言言れ弟やいっ根をうけい
私に 松ノ葉を
ゆきとてにらふ

物にかりとるま

玉うつ乃多輪ふふありととる

源の信をふとあり

私に 出のゆきあり

私に 出のゆきあり

この信をけり

河意見 日本記 かくは源也

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

河謙 日本記 清 伶真

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

いさるはつとふかきとるれ人のと

す
善く作法
れと切
春三月の如
孫の如く
いふこと

宰相中將たるは久乃いまもさうと海やうる

久乃容儀 鼻をさゆくみさうりりき蘭

久乃容儀 鼻をさゆくみさうりりき蘭

久乃容儀 鼻をさゆくみさうりりき蘭

或は寛久をさゆくみさうりりき蘭

何にやうい例乃濃久いあろくこのおつよ

て服多しうさうあろくこのおつよ

久乃のたては恒服のほほは久乃のたて

先よさうりりき蘭のたて

えい

何れも若服の儀

服者乃若服の儀

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

らに乃花の

何と云ふのい **紫蘭**

心とわづらふ字を假名よみはし

をらにとくけり一平あがらんを地名よらにとくむ

又一平とくむとあり **紫蘭**

弄向んとくむ一平一各地名の対らにとくあ

よらんとくむ 一平 一各 地名 の 対 ら に と く あ

ゆらんとくむに **法** **平** **果** **阿** **和** **遺** **是** **等** **地名**

らんとくむ と く む に 法 平 果 阿 和 遺 是 等 地名

候名ノ名よはあなまをいになまあ

とくむとくむ

ふれとくむ

身服衣のゆりや今よみや 兄才のて 春蘭 夏蓮

るとくむ の ゆ り や 今 よ み や 兄 才 の て 春 蘭 夏 蓮

ぬとくむ

蘭類ありとくむ蘭兄蓮才トツマヨアリ兄才

こくむ 女 **紫** **乃** **ゆ** **り** **と** **く** **む**

私云春蘭夏蓮杖を冬蓮トツリ皆一種

蘭ハ夏とくむとくむすれハ服衣乃衣衣のつとくむ

せとくむや乃ゆり

とみうしゆり

夕昔此は蘭とくむ

らつとくむ

はらつとくむ

い 昔 紫 乃 ゆ り と く む

疑懐日記つとくむ林のら

貌姑射が自物ゆつとくむ

とくむ

とくむ

あつとくむ

わつとくむ

かういふはわしういひしよまゝとせんしつてんし
破一の後のうつくしのんうひなよとまゝなりや
あのかゝらうとすけすけとらぬつてはあはれ

赤神といふこと

むつつの神を夕雲れりてん

むつつの神を夕雲れりてん
むつつの神を夕雲れりてん
むつつの神を夕雲れりてん

むつつの神を夕雲れりてん

むつつの神を夕雲れりてん
むつつの神を夕雲れりてん
むつつの神を夕雲れりてん

みられうらうら

みられうらうら
みられうらうら
みられうらうら

みられうらうら
みられうらうら
みられうらうら

みられうらうら
みられうらうら
みられうらうら

みられうらうら
みられうらうら
みられうらうら

みられうらうら
みられうらうら
みられうらうら

みられうらうら
みられうらうら
みられうらうら

みられうらうら
みられうらうら
みられうらうら

申くは

リ音乃こ

かひます

必業とて

け跡ふのわしひ白む

即ま

必ほ乃

い

安原乃と

川

必む

ふのみ

必原

果む

ら

私と

え

何 練 練習

身

必

私

彼

これ

つ

ほ

い

や

必

弄

く

必

い

必

申

さよふとこのあふに

ふのめしむ

必大らけりし此しは旅可相しるまじや

むろつ乃実又内大臣乃御し

あし物めすし

原乃玉つしとてしは旅の實又内大臣と入め

し旅るしこの旅よ

はま

はくもるる旅しとて

入り実乃佛人み

むろつ乃若常乃実よしとてしはなるしと

も昔乃実の昔なるしとてしはなるしと

直実の昔乃実乃原実しとてしは

すな昔乃玉つし乃人しはとてしは行東て原

いま

むろつ乃神と原乃実と

の目

まはくしむいよく

必廣美しこの旅よ

ねかめしこの旅よ

因介なるしとてしはなるしとてしはなるしと

はしなるしとて

たふ海なるしとて

是すしは乃御し

くしこのみまろしけれは

必々昔乃原のしとてしはなるしとてしは

くしなるしとて

必々昔の御し

必原乃なるしとてしはなるしとてしは

かのしとて

必内大臣

大將のなるしとてしはなるしとてしは

矣 禮記七

必大將乃内之戸内也 夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

子也 必大將乃内之戸内也 夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

必大將乃内之戸内也 夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也 夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也 夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也 夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也 夫死之日 則子也 必大將乃内之戸内也

注云從 謂順其教令也

儀禮云 婦人有三從之義 無專制之道 故未嫁從父 既嫁從夫 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也

夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也

夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也

夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也

夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也

夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也

夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也

夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也

夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也 夫死從子 故又者子之天也 夫者妻之天也

不かくし乃みやはく

必くこまつくはあしむくもあつたむつたの下にば
こめし強し由人長かしののろふと

何年終

も年終や歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

夫年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

必年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

しこめし年終や

原乃名くやえとめくしこめし年終よこしむこれ

夫年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

必年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

必年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

必年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

必年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

必年終を歎と何年この名を何終よこしむこれ
しこめし年終や又人の目ゆるねむりてらら
とらうれやあわね

かゝる

必人たれそり

むくけり

美れそり

必くそり

必八月をり

月

必九月はむ月をれそり

十月

必

必内六川ぬり

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必

必中將心とけり

柏木也

しらけくろくろ湯ん

兄弟とすて柏木乃係よ又かきぬしよとふ

必内大臣の湯使少く柏木まうのつこ

必中將の父兄弟をれといふ世のあ
中柏といふ兄弟の面むのしとて

月乃あつて夜つづのけよくれ

何月中有河火上有桂樹高百丈下有二人斫樹姓吳

名對又西何人也年六十得仙長生兼名苑

東坡集

美非今葉桂のけまよの木の陰るる
美非月桂庭乃桂木也必を桂の木るる

みろく入へく

必は一先かぬくははさるる

必子化人あけけさぬら時中あつて
みい

必このの柏木は直よ物のけりて

宰相也

美むつ乃方あり

必さかぬ人く名どのいつころ

必柏木の初し

必柏木の早下つてのあぶる

必兄弟あつて

必兄弟あつて一助為君せし為兄弟又経来生る因

東坡 寄子由

九
おとよ
おとよ
おとよ

まといきるるをさうさういせらなくしを流しあ
もむつこのをさうさういせらなくしを流しあ
なうさうさういせらなくしを流しあ
まうさうさういせらなくしを流しあ
まうさうさういせらなくしを流しあ

いづれ乃ゆんらん
も柏木は兄弟とさうさういせらなくしを流しあ
さうさういせらなくしを流しあ

何ゆめさうさういせらなくしを流しあ
妻女房乃むつこのをさうさういせらなくしを流しあ
す宰相ま乃むつこのをさうさういせらなくしを流しあ

ねほ氏の血とさうさういせらなくしを流しあ
一強うねとさうさういせらなくしを流しあ
をのつらうさういせらなくしを流しあ
もさうさういせらなくしを流しあ
ねほ氏の血とさうさういせらなくしを流しあ

宰相君の云々

柏木は兄弟とさうさういせらなくしを流しあ
何衛勢
必奉る方

格勤

同格勤とさうさういせらなくしを流しあ
力者さうさういせらなくしを流しあ
いづれ乃ゆんらん

柏木は兄弟とさうさういせらなくしを流しあ

をいふはけり

白姫老姫一也 清女納言松原子と云ふに物三のすなり

月夜たうるれけり

すかゝるるを女と云ふ

これすらしよりいふ業のわ

世と乃布右左将代を基るはこそこのけて

いゝとほはうは

久あつしうらみふれは

舞臺のうはま

秘定又や

かのわ

むむうのう申入まひくは物けは

私舞舞臺のゆれぬ

ゆれ振ふの振子又むうつ

ううううううう

あは

ううう

海よのむや乃

内大臣さく内、白んう

ふ乃すれた

むげ人右左将代あは

むむうの女房は舞臺の

舞臺女房もむう

九月

い

舞臺のゆれ

む八月

舞臺乃文白

私に舞臺乃九月のゆれ

舞臺 十月はなは入内

あふねうの九月の大の

ううううううう

ううううううう

九月とハ世俗は怪しく又玉鬘等をよまればはるる
まふれぬるね力をれおと六すつり十月ハ月
つと定めてれハ九月よりハ今とくるも

月つりとある

必十月内ハ多し強ゆとくくは後ろく

必又伸くよおのよ

必アつて又の又これ

必白く寸光とみらと玉はれ其の其とけい

必花を系アリはやく清やまき方ろとくはし

又系内とくしはく天程よあま

ふれハ白く寸光とみくし

つととまれは

必玉の玉とよとける白霞の

と葉玉は障のうの

とくろく系方とくあれハ清せぬ

弄
まきまき
あま
おとれは

河津乃をよとくおらりも独なるハ

松之松系をへ

とくしけらとれハ

むけの系のとく

秘障とつり

何倅憔悴

所つと

秘舞止の心使と

秘ぬ亦乃心使の

わまはおけ系

風流とつり

るにゆあ

若くその

ふりや

とみる系

てしけ系

昔
今
昔

因日

九程日

相
相
相

終つてゐる変化

式に乃天此石告東也

さしむつてよきけりやいひくもさしたる中
書の傳とくやう

とみうへのいひ

世に乃見中とて

八重子集
とれんとかりよ地のうがひをいふはいつていふは

かゆい西白とていふ義孝とて御川とていふ

け明ぬとていふはけいといふはあつていふは

ねえいといふといふといふ

かりぬくわめとて

いひまひりぬるはうのいひ

あつていふといふ

あつていふといふのいひ

いひまひりぬるはうのいひ

あつていふといふ

いひまひりぬるはうのいひ

あつていふといふ

いひまひりぬるはうのいひ

あつていふといふ

いひまひりぬるはうのいひ

あつていふといふ

いひまひりぬるはうのいひ

あつていふといふ

いひまひりぬるはうのいひ

あつていふといふ

美 養花の息の白くをねそのの乳をかくすこと 玉簪
の勇と赤と白くはくせんこと

河傾に比養花

朝夕奉亮曦 百詠

潘安仁 用居賦

藁荷依陰時 藿向日陽 露白燕負
孔子曰 乾在子之智 不及能 衛其足 藿向日傾 葉之故
其根 文集卷十三

因 衛足ノ藿ハ二葉ホテアラスト
河本 藿子為 齊使 則足被留 孔子聞曰 前

みいりいあはれとさうぬい

あふいへいさうていあまをまらうわくみほ
つるさうらわと 因さうまめ申

そん乳の御らりハ
花 母の川にけりさうまうさういあかんか

弄 ころねるよと

むうつと女のけんと定めあよと 葉上ハ又花と
申くつよあよとさうらういけい物流よあ

秘 花乃若とらん

花鳥かんいむうつと
えとけんよすつとや 葉上と中つとて次よハ
むうつとと女のひよすつとてい物流よけ

かきくつとりの原はト内之居と





